夜須高原から見つめるESD・SDGs
～私たちの通信文～

独立行政法人国立青少年教育振興機構

国立夜須高原青少年自然の家

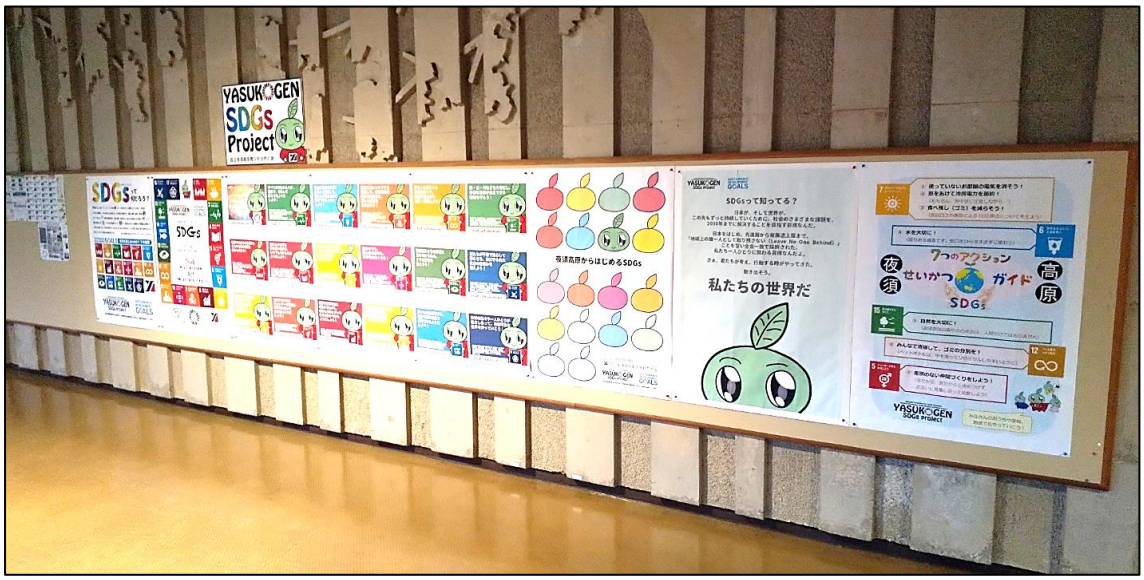
2021 年（令和 3 年）3 月

― もくじ ―

【巻頭言】「社会教育施設に期待するESD ～プライドからブランドへ～ 」

国立大学法人　福岡教育大学　教授　石丸　哲史

1　ESDとSDGsの違い　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
2　SDGs4と夜須高原プライド　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
3　ESG投資と施設　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
4　サステナブルと教育施設　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
5　SDの訳をどう考えるか　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
6　「SDGsウォッシュ」とSDGs4「質の高い教育をみんなに」　・・10
7　SDGsこじつけ論①　～活用の裁量～　・・・・・・・・・・・・・・・11
8　SDGsこじつけ論②　～社会教育の出番～　・・・・・・・・・・・・・13
9　SDGsこじつけ論③　～焦点化～　・・・・・・・・・・・・・・・・・16
10　ノーベル平和賞「国連世界食糧計画（WFP)」　・・・・・・・・・・18
11　脱炭素社会（カーボンニュートラル）　・・・・・・・・・・・・・・20
12　施設の価値創造　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
13　ジブンゴトとバーチャルウォーター　・・・・・・・・・・・・・・・24
14　価値の最大化と施設　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
15　はじめてのユネスコスクール①　～学びの深化～　・・・・・・・・・29
16　はじめてのユネスコスクール②　～つながりの連続～　・・・・・・・32
17　はじめてのユネスコスクール③　～“と”の力～　・・・・・・・・・34
18　ウイズコロナとESD　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
19　総体としてのSDGsとスマートターゲット　・・・・・・・・・・・・38
20　総花的なSDGsと考動　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40



館内掲示物

冊子の活用にあたって

本冊子は、国立夜須高原青少年自然の家が定期的に発信している『ESD・SDGs 通信』を修正・加筆したものです。

当施設は、ESD・SDGs の取組を全くのゼロベースで始めましたが、職員によってその知識や理解に差がありました。また、ESD・SDGs を施設運営との関係からどのように捉えていくべきか職場内での議論も不足していました。

施設全体を挙げて推進していくにあたっては、それらを解消する必要があり、その一つの手立てとして『ESD・SDGs 通信』を職員に向けて発信することにしました。その後、当施設が「地域 ESD 活動推進拠点」になったことを機に、日頃から連携している機関・組織の皆様にも配信させていただくまでになりました。

この度、本通信が第 20 号に至りましたので、これらを冊子にまとめ、公表させていただくことにしました。本冊子をお読みいただく方々にとって、ESD・SDGs の理解や推進の参考になれば幸いです。

～ 以下のような方々にお読みください ～

- ○ 初歩的に ESD・SDGs を理解されたい方
- ● 学校や教育施設で、ESD・SDGs を推進されたい方
- ○ ESD・SDGs の視点から組織経営を考えたい方
- ● 当施設の利用にあたって、職員がどのように ESD・SDGs と向き合っているかを知りたい方

【巻頭言】

社会教育施設に期待するＥＳＤ　～プライドからブランドへ～

国立大学法人　福岡教育大学
教授　石丸　哲史

文部科学省によりますと、新しい時代の社会教育は、単に個々人の「趣味・教養」を充足させるだけのものにとどまるのではなく、課題解決活動に係る分野など重点を置くことが望ましいとされています。すなわち、社会的課題に取り組むことは時代の要請であり、最優先されるべき今日的課題である持続可能な社会の構築は、新しい時代の社会教育にも求められているといえるでしょう。社会的課題解決に向けたグローバルな目標であるSDGs（持続可能な開発目標）が設定された今、さまざまな実践活動を展開する社会教育施設がこれに向かっていくことは大変有意義なことであります。

ESD（持続可能な開発のための教育）については、持続可能性を追求するという方向性だけは明らかであるものの、例外が見いだせない、定義がむずかしいなど、時として漠とすることがあり、とりわけ学習内容に目を向けるとこのことが顕著であります。こういうなかで、SDGs が設定されたことは、ESD においてもその到達点が明確になり、学習の内容や方法からみて ESD を深化拡充していくうえでの大きな指針となりました。

ESD の展開にあたっては、今や学校教育と社会教育との連携が欠かせません。これは、両者が棲み分けして独自にそれぞれの道を歩むのではなく、両者の弱みを相互補完し、強みを前面に押し出していくということです。SDGs の設定によって目標が共有化されたために、連携が容易になったはずです。国立夜須高原青少年自然の家は、学校教育との関係を強化し ESD の取組を深化させてこられました。

そして、このたび、定期的に発信されてきた『ESD・SDGs 通信』を『夜須高原から見つめる ESD・SDGs～私たちの通信文～』としてまとめられましたことは、社会教育施設が SDGs に向かう貴重な成果といえ、社会教育の発展に向けた大きな貢献といえます。第 20 回までの通信にみられるサステナブルなストーリーには、SDGs に向かう王道が示されています。さまざまな取組から持続可能性を追求する確固たる姿勢もうかがうことができ、この姿勢こそ「夜須高原プライド」といえましょう。このプライドがあらゆる事業や取組に首尾一貫して反映していることが、「夜須高原のどこを切っても ESD・SDGs」というホーリスティックなアプローチから見えてきます。

いわゆる「体験を経験へと昇華させる」ことに傾注するだけでなく、夜須高原の立地している環境特性を生かして、体験の端緒となる学習者の「体感」にも重きを置いた工夫が施されており、ESD の推進機関としてのブランドを確立されたといっても過言ではありません。プライドがブランドを作り上げる。国立夜須高原青少年自然の家から私自身が学んだことです。ESD 推進拠点としてのますますのご活躍を期待しています。

通信 2020.8.16

1　ESD と SDGs の違い

「ESD と SDGs の違いが分かりにくい…」という声が（職員間で）聞かれています。

ESD ＝Education for Sustainable Development（持続可能な開発のための教育）
SDGs＝Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）

ESD も SDGs も英文字ですし、先入観として苦手意識も出てきますよね。ただ、どちらも地球・人類の明るい未来を志向していることくらいは、（過去の所内研修で）何となく理解されていることと思います。

簡単に言えば、ESD は「教育（E…education）」、SDGs は「目標（G…goal）」です。一目瞭然ですね。これだけでも、両者の違いが明確になったのではないでしょうか。つまり、明るい未来像に向けて「目標」が設定され、「教育」が一つの手段になっているということで、両者が同じ土俵に登場してくるのです。

SDGs はよく見ると、複数形の「s」が付いています。全部で 17 の目標（goals）があります**※後掲１**。ちなみに、SDGs4「質の高い教育をみんなに」の中に、ESD が登場しています**※後掲２**。したがって、ESD は「SDGs のひとつ」であり、SDGs 全ての目標達成に向けた学びが ESD であると捉えることもできそうです。学校現場（ユネスコスクール）で ESD を実践してこられた手島利夫氏は、この点について次のように説明しています。

「ESD も SDGs も目指すところは全く同じです。目的はどちらも『持続可能な社会を実現すること』です。学校教育は、SDGs のことも視野に入れながらも、堂々と臆することなく ESD に取り組めばいいのです。」

【出典】手島利夫「第３回 ESD に取り組んでいたら SDGs が出てきて困っています。ほか」
教育出版 教育関連事業 Column〔教育出版株式会社 HP 2020.11.25 参照〕
https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/business/cate4/top.html

現在、様々な企業や機関、組織が積極的に「SDGs に取組んでいます・推進しています」と表明していますが、SDGs は行政でも企業でも地域活動団体でもあるいは個人でも実践ができます。ただ、私たちは青少年“教育”施設ですから、「ESD・SDGs を推進しています！」と“ESD”のことも胸を張って発信しています。

そして、私たち夜須高原が行う ESD・SDGs の取組や考え方に敢えて独自性を見出すならば、（当施設の）井上智朗所長が常日頃から語っている「夜須高原プライド」**※後掲３**が職員一人一人の意識に奥深く流れていることではないでしょうか。

※1

※2

SDGs4 とターゲット　※一部抜粋	
	【目標４】 すべての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、　生涯学習の機会を促進する。
	4.7　2030 年までに、**持続可能な開発のための教育**及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、グローバル・シチズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする。

※SDGs には、全 17 目標に対してそれぞれターゲット（全 169）が設けられています。

【夜須高原プライド（所長談話）】※3

過去の遺産や実績にあぐらをかいた自尊心的なものではなく、ましてや国立の施設であるという単なる上から目線の自負心的なものでもありません。施設職員として過去の遺産を財産として継承し、それを礎に確かな足跡（実績）を残していくという「誇り」とこの施設を生涯の職場と考える「愛」です。ESD・SDGs の取組は、まさしく「誇り」と「愛」の結晶だと考えています。

確かに、教育事業の中で ESD・SDGs に取り組んでいる施設はあります。活動プログラムの一部に取り入れている施設もあります。しかし、「夜須高原プライド」が生み出す ESD・SDGs の取組は、この施設の運営そのものであり、夜須高原のどこを切っても ESD・SDGs の考え方が浸透していることである、と思っています。ESD・SDGs の取組を、施設ナンバーワンを目指すためのツールにするつもりはありませんが、オンリーワンのモデル的・先進的取組にしたいと考えています。

通信 2020.8.24

２　SDGs4 と夜須高原プライド

今号は、SDGs4「質の高い教育をみんなに」について触れます。

この目標は、おおよそ SDGs を推進する学校や教育施設で真っ先に掲げる目標になっており、組織経営の根幹に据えられていますが、果たしてどこまで突き詰めて考えられているでしょうか。

SDGs4 で「教育」という言葉が出てきているので、“外せない”だけになっているのかもしれません。では、その前置詞になっている「質の高い」をどのように解釈すればよいでしょうか。「高度な？」「テクニカルな？」「プロフェッショナルな？」「（受益者にとって）満足度の高い？」。

「質の高い」は、SDGs の一丁目一番地になっている SDGs1「貧困をなくそう」から大きな影響を受けていると考えられます。

◆ 貧困ゆえに学校に行けない、文字が書けないゆえに職に就けない。（さらに貧困化へ）
◇ 貧困ゆえに学校へ通わず兵士になる、結婚し子どもを産む。（その子供も同じ道を辿る）
◆ 無学ゆえに騙され、働かされる、借金を膨らませる。（犯罪に手を染める）　等々

つまり、SDGs4 は「貧困」の連鎖を断ち切るために必要な“教育の質の高さ”が期待されている、と捉えた方がよいのかもしれません。この視点から、私たち機構（＝国立青少年教育振興機構）や施設の使命をふり返った場合、例えば「家庭の経済格差による体験格差の解消」への取組が“質の高さ”として合致しそうです。

機構の調査によると、子どもの頃の体験が豊富な人ほど現在の収入が高く、最終学歴も高い傾向にあることが判明しています※４。他にも、子どもの頃の体験の多寡によってその後の社会生活や生活実態にも大きく影響していることから、いかに体験が大事であるかが分かります。また、家庭の経済状況と子どもの学力形成が相関関係にあるとする報告もあります。青山学院大学特任教授の耳塚寛明氏は、「学力格差は、もはや教育問題ではない。（中略）学力格差を緩和するためには、その基盤として所得格差の緩和や雇用を促進する政策を必要とする」としつつも、「教育界にもなすべきことがある」と述べています※５。

※４「子どもの頃の体験の多寡と大人になってからの生活実態の関係」
『子どもの体験活動の実態に関する調査研究（報告書）』（2010）pp. 119-122
〔国立青少年教育振興機構 HP 「調査研究報告検索」〕
https://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/62/

※５ 耳塚寛明「小学校学力格差に挑む だれが学力を獲得するのか」
『教育社会学研究』第 80 集（2007）p. 34

なお、同機構の国立中央青少年交流の家は「SDGs4」の取組を４項目に整理しています。

国立中央青少年交流の家SDGs推進宣言について

国立中央青少年交流の家SDGs推進宣言

国立中央青少年交流の家は、様々な関係者とパートナーシップを築き、多様な体験活動を通した青少年の自立を目指すことで、未来を生きる青少年が活躍できる持続可能な社会の実現に貢献することを宣言します。

2020年2月26日

国立中央青少年交流の家 職員一同

富士のさとSDGsACTION

私たちは、「国立中央青少年交流の家SDGs宣言」の達成のため、以下の開発目標を重点に掲げ、職員一人ひとりがその推進に努めるとともに、SDGsの普及啓発にも積極的に取り組んでいきます。

4 質の高い教育をみんなに

目標4　質の高い教育をみんなに

- 青少年を対象に、青少年の課題や国の政策課題に対応した事業を実施します。
- 青少年教育施設や青少年教育団体等の指導者を対象とした研修や教職員の研修等の事業を実施します。
- 青少年の体験活動や基本的な生活習慣等の重要性の普及・啓発に努めます。
- 安全で安心な施設の整備・管理に努め、長く青少年に活用される施設づくりに努めます。

★国立中央青少年交流の家 HP〔2020. 11. 25 参照〕　https://fujinosato.niye.go.jp/about/sdgs/

では、私たち夜須高原は、この「SDGs4」をどのように受けとめればよいでしょうか。

皆さんはどのように考えますか。

これについては、私たちの矜持となっている「夜須高原プライド」（p. 2 参照）が、この目標をまさに体現するものであると考えています。

ESD をあらゆる教育・学習の側面に取り入れることを「ホリスティック・アプローチ（全人的アプローチ）」と言いますが、夜須高原プライドも「夜須高原のどこを切っても ESD・SDGs」という考え方が標榜されていますから、全ての生活場面や活動場面で教育や学びが行われることを目指した支援をしています。（右図）

★「夜須高原７つの生活アクションガイド」

したがって、私たち夜須高原が考える SDGs4 は「夜須高原プライドである」と、自信を持って伝えていこうではありませんか。

3　ESG 投資と施設

今号は、企業と SDGs について皆さんに知っておいて欲しいことを書きます。

気付いていますか？今、企業では SDGs への取組が急加速で進められていることを。

「ESG 投資」という言葉をご存じでしょうか。投資家が、投資先を選ぶ際に重視する観点（「環境 Environment・社会 Social・企業統治 Governance」）を意味します。

つまり、「企業統治をしっかり行い、環境問題や社会問題に取組んでいるか」が投資の検討材料にされるようになってきており、企業評価の指標にもなっているのです。環境や社会への視線は、SDGs とも高い親和性があります。もはや SDGs を無視した経営では、企業の成長はあり得なくなってきているのです。

これからの企業は、地球温暖化対策に取組んだり女性が活躍できる職場づくりをしたりして、世の中をリードしていくことが期待されます。学校等が取組んでいる ESD と、国や自治体・市民団体が推進している SDGs、そしてこれら企業の ESG 志向が相まって、瞬く間に社会変革が起きそうな予感です。

そのようなダイナミズムの中で、私たちは何ができるでしょうか。

私たち教育施設は、企業と同じ俎上で経営を語ることには無理がありますが、施設の現状を考える“材料”として ESG 投資を当てはめてみる価値は大いにありそうです。

《例》・夜須高原にとっての投資家（応援者）とは誰か？
・投資家（利用者）にとっての夜須高原の評価材料とは？

なお、株式会社日経リサーチは、日経「SDGs 経営調査」を実施し、結果を公表しています。事業を通じて SDGs に貢献し、企業価値向上につなげる取組を「SDGs 経営」と定義しており、調査によって各企業の得点を偏差値化して評価しています。評価の４視点を以下に抜粋しました（下図）。本通信の配信を下図に照らした場合、施設内外の「ESD・SDGs 推進体制・浸透」に寄与することが該当します。ESD・SDGs の取組において、更なる理解や前進に貢献できれば幸いです。

❶**「SDGs 戦略・経済価値」**…方針、推進体制、社内浸透、等
❷**「社会価値」**…人権の尊重、消費者課題・社会課題への対応、等
❸**「環境価値」**…温暖化ガス、消費電力、廃棄物、等
❹**「ガバナンス」**…取締役の構成、等

【出典】『SDGs 日本の挑戦 2020』日経 HR（2020.4）p.17　※一部省略

通信 2020.9.8

4　サステナブルと教育施設

今号は、「SD」の「S」について考えてみたいと思います。

「S…サステナブル」は“持続可能な”と訳されていますが、この訳語では子供たちにとって堅苦しく捉えられてしまいそうな気がしませんか。その後に続く「D…ディベロップメント」が“開発”なのですから尚更です。大人の私（筆者）でさえ、最初に聞いた時は取っ付きにくそうな印象を受けました。「持続」を謳っているのに“付き合いにくさ”を感じたのは皮肉です。

さて、子供たちにとっての難しさはその言葉からくるイメージもあるでしょうが、「経験知」としての限界もあるような気がしてなりません。まだ人生経験・社会経験が少ない子供にとって、このままだと「明るい未来はない」「地球が壊れてしまう」等々の危機感が、どこまで切実性をもって理解できるのだろう、と考え込んでしまいます。

これは、常日頃から子供たちと一緒にいる先生や保護者なら、ある程度理解させることは可能と思われますが、滞在時間が短い私たちのような施設ではどのような学びを提案して、理解してもらうことができるのでしょうか。

その一つの方策として作成したものが『夜須高原 ESD・SDGs 学びのガイド』です。学校が行う ESD を、施設利用の際にでも取り入れてもらおうというものです。つまり、学校教育との連携を意識した社会教育施設からの提案です。（右図）

そしてもう一つが、本ガイドのあとがきでも触れた「七方よし」の一つ「過去よし」の発信です。子供たちにとって遠い未来のことは想像できないかもしれませんが、夜須高原での“現状”体験をとおしてならば将来への想像が及びそうです。**※後掲６**

国立教育政策研究所『学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究〔最終報告書〕』では、ESD 視点の留意事項として「教材のつながり」を挙げており、その“つながり”の一つとして「時間的つながり」を例示しています。**※後掲７**

★国立夜須高原青少年自然の家 HP（掲載中）

https://yasu.niye.go.jp/yasukogen-sdgs-project/

※6

おわりに

江戸期から明治期の近江商人の商い信条に、「**三方よし**」という言葉があります。**売り手よし**、**買い手よし**、**世間よし**、です。SDGs を推進する人々の間では、これを更に３つ（**作り手よし**、**地球よし**、**未来よし**）付け加えた「**六方よし**」が提唱されています（元国連広報センター長・現 SDGs パートナーズ有限会社代表取締役 CEO　田瀬和夫氏）。これは、企業は社会的責任を持つという CSR（Corporate Social Responsibility）の考え方に対し、新たに SDGs を踏まえた現代版の企業経営理念としての発展性を秘めています。

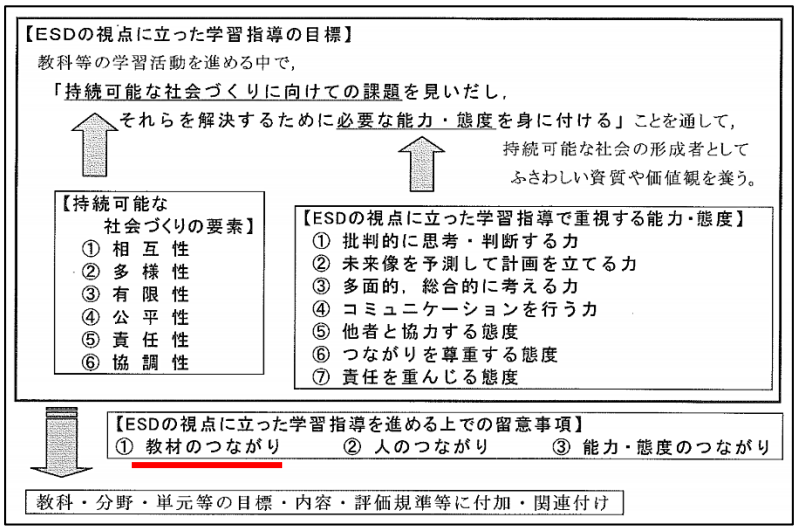
翻って、私たち“教育”に携わる青少年教育施設はどうでしょうか。本ガイドの作成過程において ESD や SDGs と向き合った時、国立夜須高原青少年自然の家はこれに“**過去よし**”を加えた「**七方よし**」の考え方に辿り着きました。売り手よし（施設）、買い手よし（利用団体）、世間よし（存立する地域）、作り手よし（利用者）、未来よし（行動変容・社会変容）、過去よし（歴史的立地環境・教育財産）、の七方です。

SDGs を推進する立場からは、過去を「オール善」とするか賛否が分かれることでしょう。「無秩序に文明発展をしてきた様々なツケが、現在の地球環境や社会生活の問題として噴出

子供たちの居住地と比べると、恐らく夜須高原は（里地里山の）自然が多く残されていることでしょう。昔から地域の人々に受け継がれてきた夜須高原での自然体験をとおして、未来の夜須高原や自分たちの居住地がどのようであって欲しいかを考えてもらうと、すんなりと想像できるのではないでしょうか。そして、それを基に今できることは何なのか、学校や地域・家庭に戻って自分や仲間（家族）と共にできることは何なのか、「批判的思考」を重ねながら行動へと踏み出すことになれば、「過去よし」の発信も重要性を帯びてきます。

なお、現在の夜須高原の自然は“よし”ばかりでなく、「負」の姿（影響）も沢山目に付きます。山道を歩くと不法投棄物が見られたり、山林の荒れ地化や豪雨による陥没・崖崩れに気付いたり…、SDGs の教材にもなりそうな実態が数多くあります。「過去よし」の中にも、厳しい現実に直面している姿が垣間見られ、未来に結び付くたくさんの気づきや課題が見つかるはずです。子供たちにとって理解が難しいと思われる「S…サステナブル」ですが、工夫次第で施設（夜須高原）からもうまく学びの提案ができそうです。（夜須高原の新たな魅力や価値創造につながります。）

※7



【出典】『学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究〔最終報告書〕』（2012）
〔国立教育政策研究所 研究成果アーカイブ　2021.1.12 参照〕
https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/esd_chuukan.pdf

2020.9.14

5　SD の訳をどう考えるか

前号に引き続き、「SD」について書きます。

これまで ESD や SDGs が、国内であまり広がりを見せなかった理由として、日本人特有の英文字に対する苦手意識が少なからず働いたのではないかということや、訳語の「持続可能な開発」が醸し出す“取っ付きにくさ”が前面に出て、“つかみ”の段階から敬遠されてしまう傾向があったのではないかということを前号で紹介しました。

とくに学校関係者には、「D…開発（ディベロップメント）」の言葉がゼネコン等による大規模開発・造成の姿として想像されてしまい、環境教育や自然保護の立場から素直に受け止めることができない印象があります。したがって、ESD・SDGs 推進者の間では、「持続可能な発展」とか「持続可能な社会づくり」という訳語の使用も見受けられます。例えば、新学習指導要領には「持続可能な社会の担い手」と表現されています。先生方や子供たちが使用する場合も、「社会（づくり）」とした方がより理解し易いと感じます。

> 文科省は、「ESD の訳語については、『持続可能な発展のための教育』と訳し、略称として『持続発展教育』を用いてきましたが、2014 年のユネスコ世界会議に向け、日本政府内の訳語を統一する必要があるため、今後 ESD の訳語は、政府として作成する文書においては、『持続可能な開発のための教育』としました」と注釈しています。

【出典】「Education for Sustainable Development（ESD）の訳語の取扱いについて」（2013）
〔文部科学省 HP 2021.1.9 参照〕
https://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm

筆者としても、「社会（づくり）」とした方が収まりいいような気がしているのですが、ESD・SDGs に向き合っていると実はそれではいけない面もあるようなのです。（当施設の）教育事業「ボランティア応援講座」で講師予定の亀井直人氏（「SDGs 推進ネットワーク in 九州」代表）から、事前打合せの時に以下のようなご指摘をいただきました。「仮題になっている研修標題『考えよう私たちの未来社会』を『…未来』にしてください」。つまり「『…未来社会』にしてしまうと SDGs が目指す全体像が見えなくなります」というのです。

2015 年に国連サミットで採択された SDGs は、「社会・経済・環境」の視点から総合的・統合的に取組んでいくことが世界各国に求められました。“トリプルボトムライン”と呼ばれるこの３つがバランスよく保たれつつ、世界を導いていくことが SDGs のアプローチになっているのです。

「社会」のあり様を常に省察しなければ、その陰で取り残されてしまう人が出てきます。
「経済（お金）」ばかり追い求めると、安心安全な環境を失ってしまうかもしれません。
「環境（自然）」を気に過ぎると、社会活動でできることは限られてしまいます。

このように三者の程よいバランスが“持続可能性”として担保されており、「開発」の行き着く先の姿として“誰一人取り残されない”未来像が願われているのです。「SD」をどう訳すかばかりに囚われ過ぎると、先に進めませんのでこのくらいにしますが、少々こだわってみると「SD」にはいくつもの指標材料が包含された概念であることがお分かりいただけたかと思います。

（追伸）

先日、九州地方 ESD 活動支援センター（EPO 九州）の方々が来所されました。意見交換する中で、「SDGs には 18 番目の目標はありませんが、一人一人の心の中にある」というお言葉をいただきました。世に叫ばれている SDGs は 17 のゴールだけですが、そこからこぼれ落ちてしまっている“取り残された”ゴールがあるのかもしれません。もしくは、SDGs には本来、17 ゴールの枠組みには囚われない問題意識と行動が託されているのかもしれません。

夜須高原でも、施設としての“SDGs18”が存在するかもしれませんね。個人としての“SDGs18”も一緒に考えながら、これからも歩んでいきませんか。

【教育事業「ボランティア応援講座」の様子】

※本事業は、福岡教育大学
鈴木邦治教授の集中講座
「体験活動の指導法」と
兼催で行われました。

★国立夜須高原青少年自然の家ブログ「夜須高原のそよ風」

http://yasukougen.blog58.fc2.com/blog-entry-2001.html

http://yasukougen.blog58.fc2.com/blog-entry-2005.html

通信 2020.9.22

６　「SDGs ウォッシュ」と SDGs4「質の高い教育をみんなに」

今号は「SDGs ウォッシュ」と「SDGs4」について考えます。SDGs ウォッシュとは、SDGs に取組んでいるフリをすることの意です。“形だけの環境保護”を意味する「グリーンウォッシュ」から派生した用語です。

襟元に SDGs バッジ（下図左）を付けていても、意識や行動が伴っていなければ見せかけに過ぎません。また、様々な事業に SDGs ロゴを充てる（下図右）だけで目的を終えていては、SDGs を推進していることにはなりません。これは“紐づけ”意の「マッピング」「ラベリング」という言葉で語られています。例えば、その事業が SDGs のどれに当てはまるのか整理できたものの、案内チラシや事業報告等へのマッピングだけで満足しまっているケースはないでしょうか。目標達成のための実質的な中身が伴っていなければ、外部には「やってる感」の演出にしかならなくなります。

私たち夜須高原は、その落とし穴だけは避けたいと考えています。実は、その確認をさせていただいたのが本通信第２号（pp.3-4）で考えた「SDGs4」でした。“質の高い教育とは？”というテーマでしたが、「夜須高原プライド」がまさにそれを体現しているのではないかというものでした。夜須高原プライドを通して施設運営が行われ、「施設のどこを切っても ESD・SDGs の学びや活動に溢れている」姿こそが、利用者や地域の方々に“質の高い教育”を実感していただくことになります。もうすぐ、私たちは「地域 ESD 活動推進拠点」になります（その後、2020 年 10 月に正式登録されました）。ぜひ今一度、SDGs ウォッシュと SDGs4 を思い新たに考えてみてください。

なお、“質の高い教育とは？”という根本的なところから議論している私たちの姿勢は、すでに SDGs ウォッシュに陥っていない証左でもあります。ちなみに、“質の高い教育”についてユネスコ仁川宣言（2015）にでは、以下のとおり定義されています。とくに下線赤字（筆者）については、社会教育施設としてもその獲得において大いに貢献できそうです。

> 創造性や知識を強化するものであり、また、分析力があり、問題解決力のあるハイレベルの認知的で、対人的、社会的なスキルのほか、基礎的な読む力、計算力の習得を確実にするもの

【出典】世界教育フォーラム 2015「【仮訳】仁川（インチョン）宣言」（2015）
〔文部科学省 HP　2020.1.13 参照〕
https://www.mext.go.jp/unesco/002/006/001/shiryo/attach/1360521.htm

通信 2020.10.7

7　SDGs こじつけ論①　～活用の裁量～

今号は、SDGs 活用の裁量について考えます。

同僚との会話でよく聞かれるのが、次のような悩みや疑問です。

＝自分たちの事業や活動において＝

◆ SDGs をどこまで結び付けてよいのだろうか？（あれもこれも関連付けられそう…）

◇ どの程度まで“こじつける”ことが許されるのか？（強引にその目標に当てはめてしまっていないだろうか…）

この点について、国際協力 NGO センター（JANIC）が面白い提案をしています。SDGs 理解促進ツール「ひとこと多い張り紙」です。身近な張り紙の中に見られる、SDGs の想いに気づかせてくれる言葉を取り上げて、17 目標全てをポスター化しています（ダウンロード可・フリーフォーマット）。

例えば、飲食店でよくある張り紙の一つ「冷やし中華はじめました」を、SDGs13「気候変動に具体的な対策を」※後掲８と結び付けています。初めて Web ページを閲覧した方は、“ここまで飛躍してよいのか？”と驚かれると思います。私たち施設でもこれを参考にしてポスターを作成し、掲示しています。（右図）

ちなみに、冷やし中華と SDGs13 の関係性について、JANIC は「冷やし中華はじめました」というフレーズの前文に「地球の気温が年々上昇しているので」との理由を添えて、見る人に SDGs13 における気候変動問題へと想像を掻き立てています。他にも、「傘忘れ注意」というよく見かける注意書き掲示物を、SDGs12「つくる責任つかう責任」でアレンジしています。このフレーズの前文には、「いったい何本失くせば、気が済むのか知りませんが」との言葉が付いており、大量生産・大量消費社会への問いかけを暗示させています。

さて、SDGs の取組を難しくさせているのは、国内的にはほぼ達成できていると感じられるようなものもあり、それをどう捉えるのかが“こじつけ”論とも相まって、更にモヤモヤ感を生み出しているのではないでしょうか。

例えば、SDGs6「安全な水とトイレを世界中に」※後掲９は、日本では衛生的にもほぼ安心して使えることができていますし、高い水道技術力を持つ北九州市（福岡県）は東南アジア諸国を中心に職員を派遣して、インフラ整備や人材育成の面で国際貢献をしています。（北九州市上下水道局 HP 参照）

…では、SDGs6 はあまり重視しなくてよいのでしょうか。

ここで重要になってくるのが、「ESD の学び」ではないでしょうか。世界の問題を身近な問題（ジブンゴト）として捉え、行動を起こしていく学びです。ESD を念頭にすると、SDGs6 は国内的には決して終わっている目標ではなく、「水を大切に使う」という生活倫理観や行動規範的な目標にも置き換えることができます。私たち施設そのものを一つの「地球」と考え、施設（地球）でアクセスできる限られた「水資源」と考えてみてはどうでしょうか。そうすれば、SDGs6 も施設の目標としてジブンゴト化できると思いますし、「水」をとおして様々な ESD の学びができる施設として提案できるはずです。

JANIC「ひとこと多い張り紙」も、遠い問題（タニンゴト）のように考えられてしまう SDGs を、身近な生活課題として落とし込んでいる点で素晴らしい発想のように思います。

※８

	【目標 13】 気候変動とその影響に立ち向かうため、緊急対策を取る。
	13.1 全ての国々において、気候関連災害や自然災害に対する強靭性（レジリエンス）及び適応の能力を強化する。 13.3 気候変動の緩和、適応、影響軽減及び早期警戒に関する教育、啓発、人的能力及び制度機能を改善する。

※９

	【目標６】 すべての人に水と衛生へのアクセスと持続可能な管理を確保する。
	6.3 2030 年までに、汚染の減少、投棄の廃絶と有害な化学物・物質の放出の最小化、未処理の排水の割合半減及び再生利用と安全な再利用の世界的規模で大幅に増加させることにより、水質を改善する。 6.4 2030 年までに、全セクターにおいて水利用の効率を大幅に改善し、淡水の持続可能な採取及び供給を確保し水不足に対処するとともに、水不足に悩む人々の数を大幅に減少させる。 6.6 2020 年までに、山地、森林、湿地、河川、帯水層、湖沼を含む水に関連する生態系の保護・回復を行う。

通信 2020.10.18

8　SDGs こじつけ論②　～社会教育の出番～

前号では、SDGs“こじつけ論”を紹介しました。

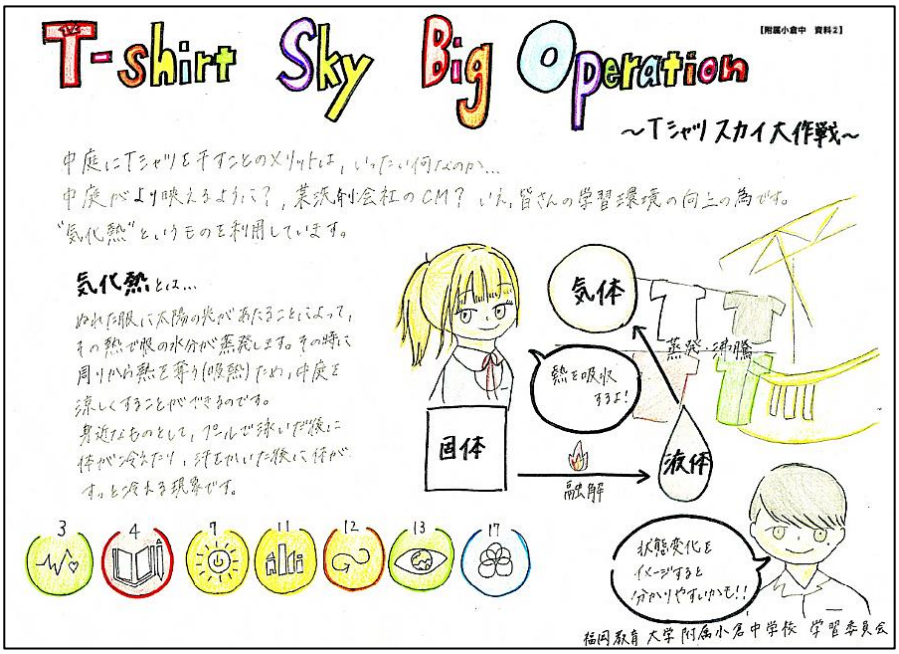
本通信を配信させていただいている九州地方 ESD 活動支援センター（EPO 九州）の方から、次のような感想を頂戴しました。

> 「こじつけ論については、タグ付け、カスタマイズやローカライズという言葉でも捉えられるテーマかと思います。各主体が本業として持続的に取組むにあたっては、最初の取組の端緒として、先号の JANIC のような発想も必要ではないかと思います。ある種の奥ゆかしさから。当初から厳密な姿勢を求めると、業種や分野が狭まってしまうことから、SDGs の潮流は次第に柔軟なものになってきたのではと想像しています。」

筆者も同感です。SDGs をどのように捉えていくかは、推進者の悩ましいところでもありますが、逆に腕の見せどころであり、私たち教育施設にあっては“社会教育の出番”になります。まさに ESD（教育）でフォローアップする役割が期待されているのではないでしょうか。

先日（2020 年 9 月）、福岡教育大学附属小倉中学校で面白い取組が地元の NHK ニュースや新聞で紹介されました。その名も「Ｔシャツスカイ大作戦」（下図）。SDGs を意識した生徒会活動です。

★福岡教育大学附属小倉中学校から提供いただいた資料①



水で濡らしたＴシャツを校舎内に吊るし、気化熱によって涼を得る取組です。これは SDGs13「気候変動に具体的な対策を」が大きく意識されており、そのターゲット 13.3「気候変動の影響軽減に関する教育、啓発」の具体的行動になります※前掲８（p.12）。

しかし、SDGs13 だけに焦点が当てられると、「SDGs の学び」の本質である総合的・統合的な学びには至らず、課題の一面を捉えただけになります。

それに関しては、「古着」に着目していた点で SDGs12「つくる責任つかう責任」も強く意識されており※10、タンスの奥に仕舞い込まれた古着の再活用を提案するものになっています。また、その古着は支援物資として生かされ、売上の一部がワクチン寄付になるそうです※後掲 11。これは SDGs1「貧困をなくそう」の具体的行動にも通じてきます。

小倉中学校の生徒さんが、更にどこまで意識していたかは不明ですが、他にも、この取組は例えば SDGs7、10、11、17 にも深く通じてきそうです。（その後、小倉中学校の先生から、生徒さんたちが他の SDGs にもつながる視点を持っていたことを聞きました。ちなみに、生徒さんたちは SDGs3、4、6、12、13、14、15 に着目していました。※後掲 12）

SDGs7「エネルギーをクリーンにそしてみんなに」は、気候変動の主原因と考えられる CO2 排出問題に迫る視点になりますし、SDGs10「人や国も不平等をなくそう」は、そもそも生まれ育つ国家によって、衣服が十分に着られるかどうかといったか家庭での経済状況に格差があること自体が、不平等を明確に表しているようにも感じられます。

また、SDGs11「住み続けられるまちづくりを」は、ヒートアイランド現象に対する都市環境への悪影響軽減に踏み込めますし、SDGs17「パートナーシップで目標を達成しよう」は、気候変動問題に取組む様々な組織・団体がある中でその一翼になり得ます。

このように見てくると、単なる“こじつけ”といった表現とはまた違った意味で、様々な課題に通じる“つながり”の奥深さに気付くはずです。ESD や SDGs を追究して行けばいくほど、その本質を見失ってしまいそうな感覚に陥りますが、実のところは現在を生きる私たちに課せられた、オープンエンドで豊かな発想による取組提起になっているような気がしています。

※10

	【目標 12】 持続可能な消費と生産のパターンを確保する。
	12.3 2030 年までに小売・消費レベルにおける世界全体の一人当たりの食料の廃棄を半減させ、収穫後損失などの生産・サプライチェーンにおける食品ロスを減少させる。 12.4 2020 年までに、合意された国際的な枠組みに従い、製品ライフサイクルを通じ、環境上適正な化学物質や全ての廃棄物の管理を実現し、人の健康や環境への悪影響を最小化するため、化学物質や廃棄物の大気、水、土壌への放出を大幅に削減する。 12.5 2030 年までに、廃棄物の発生防止、削減、再生利用及び再利用により、廃棄物の発生を大幅に削減する。 12.8 2030 年までに、人々があらゆる場所において、持続可能な開発及び自然と調和したライフスタイルに関する情報と意識を持つようにする。

※11

日本リユースシステム株式会社が運営する「古着 de ワクチン」は、福祉作業所（障がい者雇用）で製造された回収キットによって家庭にある古着を集荷し、１口につき５人分の生ワクチン（ポリオワクチン）を認定 NPO 法人世界の子どもにワクチンを日本委員会に寄付しています。生ワクチンはミャンマー、ラオス、ブータン、ラオスの子供たちに届けられています。

また、集荷された古着の一部は直接、発展途上国に輸出されて現地で雇用された方々によって選別・販売されています。その売上の一部が、ワクチン寄付になっています。

古着回収とワクチン寄付を結び付けた国際貢献の発想や、その取組過程で新たな雇用を創出したことなどが評価されて、SDGs 推進本部（首相官邸）から第 3 回「ジャパン SDGs アワード」特別賞（SDGs パートナーシップ賞）を受賞しました。

【参考】「古着 de ワクチン」〔日本リユースシステム株式会社運営 HP 2021.1.13 参照〕

※12　福岡教育大学附属小倉中学校から提供いただいた資料②

通信 2020.10.26

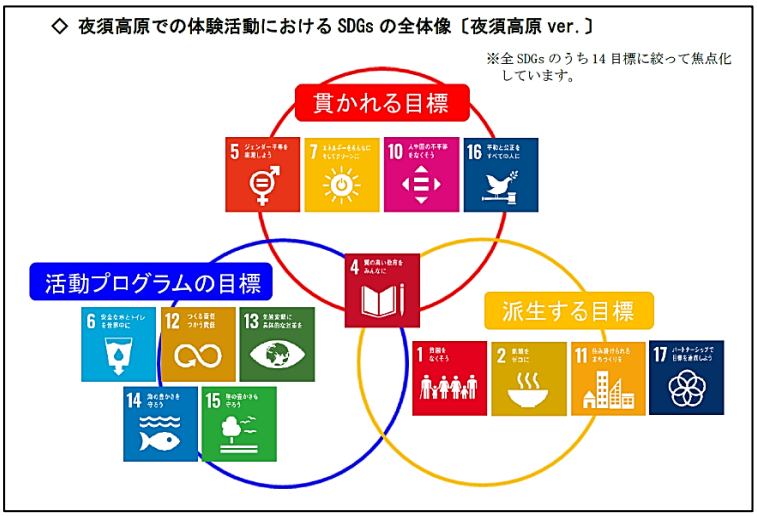
9　SDGs こじつけ論③　～焦点化～

SDGs“こじつけ論”の第３弾です。この問題は、SDGs を単なるタグ付け作業だけに終っているのか、あるいは整合性を踏まえて検討されているかがこじつけの分岐点になっている気がします。

本通信第６号で触れた「SDGs ウォッシュ」（やってる感のみの演出）に陥らないように、推進する側がしっかりと向き合っているかがポイントではないでしょうか。すなわち、個々の SDGs を教育的視点（ESD）でどのように捉え、事業や活動と結び付け、課題解決に向けた成果としてイメージできているか、です。

私たち夜須高原は、17 ある SDGs のうち 14 に絞ってそれを提示しています。（下図）

これも本来ならば、SDGs の全てが複雑に絡み合っていることから、全 17 目標を取捨選択するのは禁じ手のように感じられますが、「自然の家」という施設の特性を踏まえて、敢えて 14 に限定して言及させていただきました。（複雑に絡み合う SDGs：同上『ガイド』p. 20 参照）



★『夜須高原 ESD・SDGs 学びのガイド』国立夜須高原青少年自然の家（2020）p. 21 参照
https://yasu.niye.go.jp/wp/wp-content/uploads/2020/08/yasukogen-esd-sdgs-leanning-guide.pdf

なお、14 に絞った SDGs のうち（右図上）、厳密には「派生する目標」の４つを除いた 10 の目標が、夜須高原で直接的に関係する目標ということで提案しています。

SDGs の各目標を深く考えることなく、ただ単に「その内容が当てはまっているから…」だけのタグ付けならば、それは“こじつけ”と指摘されても仕方ありません。私たち夜須高原は、SDGs を精査・検討した上で 14 目標に焦点化させていただきました。

また、ここに来て SDGs3「すべての人に健康と福祉を」を、施設の目標として更に加えるべき状況になっていることをお伝えしておきます。

ターゲット SDGs3.3 には「伝染病の根絶、感染症への対処」が明記されています※13。施設は現在、新型コロナウイルス感染症予防への対策・対応をしていますので、十分に当てはまってくる目標に

なりますし、SDGs3.9 は「“川”の水質汚染から来る健康被害の減少」も範疇に属すると考えられ、当施設の活動（野外炊飯や川遊び等）とも深く結び付いているからです。

この件に関しましては、現在、北九州市の企業「シャボン玉石けん株式会社」様とどのような連携ができるのか協議しています。（下図）

民間企業等連携推進事業　報告

シャボン玉石けん株式会社　様

1　連携企業概要

本企業は、福岡県北九州市に本社を置いている。「青いお空が欲しいのね…♪」のテレビ CM でも有名である。「シャボン玉石けん」は、自社の製品が皮膚の湿疹原因と判り、合成洗剤から無添加石けんに切り替えたという誕生の歴史を持つ。「健康な体ときれいな水を守る」という企業理念のもと、石けん業界でいち早く人・環境へのやさしさを訴え続けてきた。石けん業界初となる ISO14001（国際標準化機構が策定した環境マネジメントシステムの認証規格）も取得している。また、商品づくりをとおして社会に貢献し、地球環境の保全と次の世代に住みよい地球と社会を残せるよう SDGs 宣言も表明している。

2　連携事業

①夜須高原こども芸術まつり（参加対象：家族）
②夜須高原イングリッシュキャンプ（参加対象：家族）
③夜須高原スマイルライフキャンプ（参加対象：北九州市母子寡婦福祉会会員）

3　連携内容

①②の事業において、同社の「手洗い石けんバブルガード」および「手洗いの仕方チラシ」のご提供をいただいた。

①では全８回実施された藍染体験や木工クラフト、ピザづくり等々において、②では外国料理の調理体験において、手洗い時に洗剤を使用した。チラシは、資料として配付し参加者に活用していただいた。

③の事業では、新型コロナウイルス感染症の予防対策にもなる手洗いの重要性のお話、親子での石けんづくり体験をとおして環境問題や健康を考えることができるような活動プログラムを、ESD の視点も踏まえながら実施に向けて協議中である。

★「夜須高原 Support Project」　国立夜須高原青少年自然の家 HP
https://yasu.niye.go.jp/yasu-support/
【参考】「民間企業等との連携」　国立青少年教育振興機構 HP
https://www.niye.go.jp/kigyo/

※13

	【目標３】 あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を推進する。
	3.3　2030 年までに、エイズ、結核、マラリア及び顧みられない熱帯病といった伝染病を根絶するとともに肝炎、水系感染症及びその他の感染症に対処する。 3.9　2030 年までに、有害化学物質、並びに大気、水質及び土壌の汚染による死亡及び疾病の件数を大幅に減少させる。

通信 2020.11.6

10　ノーベル平和賞「国連世界食糧計画（WFP）」

さて、今号と次号は SDGs に関連する時事ニュースを取り上げます。

SDGs の取組について、私たちは施設での生活や活動の中からできることを考えています。これは地道な積み重ねですので、例えば１か月後の施設がガラリと変ってしまうことはありませんが、これを施設の外に目を向けてみると、私たちが思っている以上に急加速で普及・拡大しているようです。例えば、本通信第３号（p.5）でも取り上げた「ESG 投資」は、企業が経営面で「環境 E・社会 S・企業統治 G」に配慮していなければ、投資の対象として信頼されないくらいになっています。

そうした動きに注視しておかないと、社会から取り残されてしまうことになるかもしれません。とりわけ、私たちは国立施設であり、地域におけるナショナルセンターとしての使命を発揮する立場にあることから、社会状況にはとくに敏感になっておく必要があります。

先日、2020 年のノーベル平和賞が発表され、「国連世界食糧計画（WFP）」が受賞しました。紛争地域などで食糧支援を行う活動が大きく評価されました。ノーベル賞委員会は、「紛争地域での平和に向けた環境改善への貢献と、飢餓を戦争や紛争の武器に利用することを防ぐ取組で先頭に立っている活動」を称えての授与だと説明しています。

WFP は昨年､深刻な食糧不安と飢餓に直面する 88 か国で１億人近くを支援しました｡ヘリコプターやゾウ、ラクダを駆使して食料（150 億回配給分）を届けたそうです。それでも、必要数に比べるとごくわずかでしかないと言います。

受賞に際し、WFP の報道官が SDGs の取組の本質（総合的・統合的に捉えること）につながる重要な示唆的発言をしています。「WFP の活動の意義の一つは、きょう、あすの食糧を届けるだけではなく、その翌日、それ以降も人々が自らを支えていけるよう、知識を提供することにある」と。さらに、救援物資が届けば終わりではなく、やはり「平和が必要だ」と強調し、「これらの（紛争に見舞われている）諸国には安定が必要だ。これこそが基盤となる。平和でありさえすれば、他の苦しみは少しでも和らぐ」※14 と述べました。（下線部：筆者）

目先のことだけでなく将来をも見据えたビジョンは、なんだか新潟県（旧長岡藩）で語り継がれる「米百俵の精神」にも通じてきそうです。（ただ、実際は似て非なるものです。WFP の取組は目前の貧困状態に対応しながら教育や平和・安定の必要性を訴えていますが、米百俵の精神は貧困の現状よりも将来への人材育成や国の豊かさに着目した発想になっています。※後掲 15）

※14「2020 年ノーベル平和賞、国連の世界食糧計画に紛争地域での活動評価」
AFPBB News（2020.10.9 配信記事）　〔2021.1.15 参照〕

SDGs については、個々の目標を個別に見ていくだけでなく、総合的・統合的に捉えていく必要性があることはこれまで言及してきた通りです。上記の文脈で考えると、SDGs2「飢餓をゼロに」にするは、飢餓・貧困から脱出するための地道な SDGs4「質の高い教育をみんなに」が必要であり、安心して暮らせるための SDGs16「平和と公正をすべての人に」にも目を向けるべき、となります。

これは、『ESD・SDGs 学びのガイド』（p. 26、p. 29 参照）でも触れられています。
（「レバレッジ・ポイント」及び「SDGs のつながりについて」『夜須高原 ESD・SDGs 学びのガイド』国立夜須高原青少年自然の家（2020））
https://yasu.niye.go.jp/wp/wp-content/uploads/2020/08/yasukogen-esd-sdgs-leanning-guide.pdf

このように、SDGs の“メガネ”をとおしてノーベル賞を見てみると、ノーベル賞委員会の真の目的は、活動内容や経歴の評価、表彰を行うことだけでなく、それに「共感」「共鳴」した人々による「行動」を願っているのかもしれません。

「皆さん一人ひとりにできることは何ですか？」と。「夜須高原でできることは何ですか？」と。

※15　米百俵の精神

戊辰戦争に敗れ、焦土と化した長岡藩のまちに、窮状を知った三根山藩から米百俵が見舞いとして贈られてきました。食べるものにも事欠く藩士たちは、これで一息つけると喉から手が出そうなほど喜びましたが、藩士が手にしたのは「米を売り学校を立てる」との通達でした。長岡藩の大参事、小林虎三郎はその米を家中に分配せず、国漢学校設立の資金に充てたのです。そのとき、藩士たちには「百俵の米も、食えばたちまちなくなるが、教育にあてれば明日の一万、百万俵となる」と諭しました。
作家山本有三の「米百俵」に書かれたこの戯曲は、平成 13 年、小泉純一郎首相の所信表明演説にも採り上げられ、全国で知られるようになりました。

通信 2020.11.8

11　脱炭素社会（カーボンニュートラル）

前号では、国連食糧計画（WFP）のノーベル平和賞受賞（SDGs2 関連）を取り上げました。今号は、SDGs13「気候変動」に関する我が国の動きを紹介します。

先日（10/26）、臨時国会の所信表明演説で菅首相が以下のような宣言をしました。「我が国は、2050 年までに、温室効果ガスの排出を全体としてゼロにする。カーボンニュートラル、脱炭素社会の実現を目指すことを、ここに宣言いたします」。

【出典】「第 203 回国会における菅内閣総理大臣所信表明演説」 2020.10.26 付
https://www.kantei.go.jp/ 〔首相官邸 HP 2021.2.20 参照〕

【参考】「地球温暖化対策推進本部」 2020.10.30 付
https://www.kantei.go.jp/ 〔首相官邸 HP 2021.1.24 参照〕

カーボンニュートラルは、出量取引などで吸収される CO2 量を差し引きゼロにすることです。国連の報道官は「事務総長は、菅義偉内閣総理大臣が 2050 年までに温室効果ガス排出量正味ゼロの達成を目指すことを発表されたことを、非常に意義深い前向きな動きと受け止め、心を強くするとともに、菅総理のリーダーシップに感謝の念を表明します」と述べて、歓迎しました。

また、「事務総長は、2050 年までに温室効果ガス排出量正味ゼロを達成するために必要な技術的、資金的、工学的ツールが、日本にはすべて揃っていると確信しています。また、日本が再生可能エネルギーの普及に向けた技術援助や、官民の資金供与などを通じ、同じ目標の達成を目指す開発途上国を支援していくことも確信しています」※後掲 16 と述べて、日本が世界の温暖化対策を牽引することを期待しました。日本のトップである菅首相が国内外にカーボンニュートラルを表明したことにより、恐らく今後は国内でその取組が瞬く間に進展することでしょう。

前号でも触れましたが、世界では私たちが思っている以上に、この脱炭素社会や SDGs への取組が急加速で進んでいます。国内で、これにいち早く反応しているのが CO2 排出に関係する民間企業です。本田技研工業の渡辺康治ブランド・コミュニケーション本部長は、「世の中が求めるものが、もっと持続可能性のある方向に、急速にシフトしていってしまいました。（中略）新型コロナウイルスを経験したことで、求められるスピードが加速してしまった。それが大きな変化点だと思います。我々がこんなスピードで開発していてはだめだということです」と語っています※17。

続けて、「この持続可能というもののひとつに、カーボンニュートラル＝環境対応というのがあって、それをすごいスピードで進化させていかなければいけないのです。（中略）全てのパワーユニットでしっかりと環境対応をしていかないと、社会の要請に応えられないと思いました」とも。「カーボンニュートラル」については、ホンダ以外にも様々な企業で言及されています。企業の事業展開や発展性、社会的責任（CSR）、収益にも直結するため、本当に素早い反応です。

ちなみに首相官邸には、首相を本部長とする SDGs 推進本部が設置されていますが※18、私たち公的施設の推進状況はいかがでしょうか。民間と比べて公的機関は政策や業務対応に「スピード感がない」と揶揄されることがありますが、2030 年までを期限とする待ったなしの SDGs にこれでよいのでしょうか。

上述した世界情勢において、民間企業は SDGs に背を向けた場合、収益や投資にも大きな影響を及ぼしかねず大変切実性がありますが、私たち施設にとって SDGs がそれほど緊迫性のない感覚ならば、今後、社会の中でどのように存在しているのでしょうか…。

◆ 利用者も、SDGs すら念頭にない生活や活動になってしまう…?!
◇ 施設職員が恥ずかしくなるくらい SDGs 意識をお持ちの利用者ばかりだとしたら…?!
◆ 学校が行う ESD に対して施設が追い付いていないことも…?!

私たち夜須高原は「地域 ESD 活動推進拠点」（10 月登録）になりましたので、このような問いや省察をしながら日々の業務にあたっていきたいものです。

※16「菅総理のカーボンニュートラル宣言に関する事務総長報道官の声明」（2020.10.27 付）
〔国際連合広報センターHP プレスリリース 2021.2.20 参照〕

※17「ホンダが F1 を諦めてまで目指そうとする、”カーボンニュートラル”とは何か？『近いうちに、具体例を示したい』」 motorsuport.com 日本版 （2020.10.17 配信記事）
〔motorsuport.com 2021.1.24 参照〕
【参考】「FIA フォーミュラ・ワン世界選手権への参戦終了について」（2020.10.2 付）
〔HONDA HP ニュースリリース 2021.2.20 参照〕

※18「持続可能な開発目標（SDGs）推進本部」（2020.10.27 付）
https://www.kantei.go.jp/jp/singi/sdgs/ 〔首相官邸 HP 2021.2.20 参照〕

通信 2020.11.15

12　施設の価値創造

前号では、SDGs の取組が加速する社会との対比から、私たち施設の喫緊性について考えました。

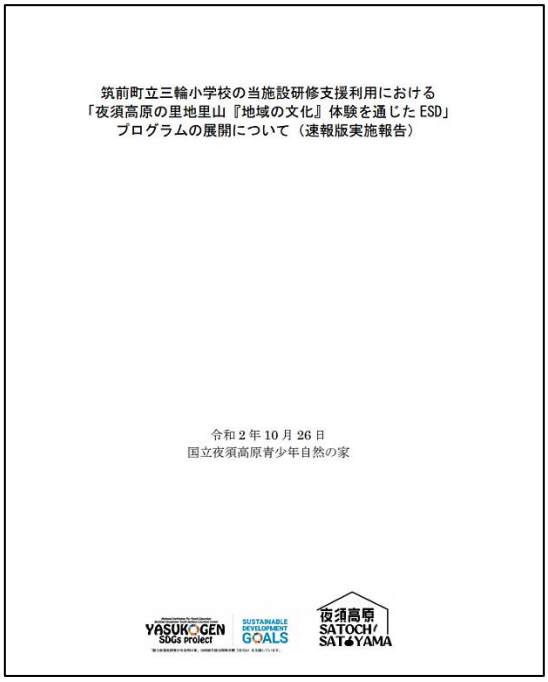
企業は、社会の動きに背を向けていては取り残される危機感が強くあります。それはすなわち収益や存続（将来性・発展性）に大きくはね返ってきます。翻って私たち教育施設は、SDGs にそれほど力を入れなくても集団宿泊や体験活動のニーズが一定程度あることを背にして、後回しになってしまうことも起こりえます。

このスピード感の違いを、私たちはどのように受け止めるとよいのでしょう。民間でも勤務経験をもつ千葉商科大学・基盤教育機構の笹谷秀光教授は、ご自身が監修した新刊書を紹介するにあたって、SDGs 普及・拡大の切迫感を次のような表現で感想を述べています。「本書で強調したことは『SDGs は怖い』という点です。SDGs は自主的取り組みが基本です。やれる人がやれるところからすぐにでも着手しようというルールです。そうしなければ、もはや地球規模の課題の対処に間に合わないという危機感が背景にあります。このルールは怖いです。どんどん差がつくからです。『ぼーっと』していれば置いていかれます。日本が欧米に置いていかれる。日本の中でも SDGs 仲間の埒外に置かれます。（中略）横並びの思考から一刻も早く抜け出して、すぐにでも自社は何をすべきか、自分は何ができるかを、SDGs をヒントに考えなければいけません」。※後掲 19

一方で、当施設所長の井上は「SDGs を利用者獲得のツールにしてはならない」と語っています。

両者の主張を掛け合わせると、教育施設としての向き合い方がうまく見えてきそうです。すなわち、SDGs をとおして施設の“新たな価値を創造”していく姿勢です。

先日、「地域特色化プロジェクト」事業を地元の筑前町立三輪小学校と連携して実施しました。施設が立地する里地里山の特色を改めて掘り起こし、それを小学校側に提示しました。その結果、今年は同校が毎年実施している夜須高原での体験学習とは違ったものになりました。事前に、子供たちは筑前町の自然について学習し、居住地と夜須高原がつながっていることに気づきました。そして、夜須高原の住民をゲストティーチャーに招いて更に理解を深めました。（右図）


筑前町立三輪小学校の当施設研修支援利用における
「夜須高原の里地里山『地域の文化』体験を通じた ESD」
プログラムの展開について（速報版実施報告）

令和 2 年 10 月 26 日
国立夜須高原青少年自然の家

★「夜須高原の里地里山『地域文化』体験を通じた ESD」〔国立夜須高原青少年自然の家 HP〕
https://yasu.niye.go.jp/yasukogen-sdgs-project/

その後、事前に得られた知識と現実の差を埋めるため、当施設（夜須高原）に来られました。夜須高原の姿が居住地とどう違うのか、あるいはどのようなつながりがあるのかを探究しました。こうした視点は、環境省が提唱する「地域循環共生圏づくり」にも通じてきます。（下図）

【参考】「環境省ローカル SDGs」〔環境省 HP 2021. 1. 24 参照〕 http://chiikijunkan.env.go.jp/

また、同年 12 月には、福岡県大牟田市のユネスコスクール（大牟田市立天の原小学校）が初めて当施設に来られます。地元での「海・川」の学習を踏まえ、「山（森）」の学習をするためです。

私たち作成した『夜須高原 ESD・SDGs 学びのガイド』をネット検索上で知り、「６年生の校外学習として利用させていただきたい」と、ご相談いただきました。ちょうどこの時、上述した三輪小の取組が参考になるのではないかと思われ情報提供したところ、ここでの活動の姿が更にイメージ化されて、より一層「夜須高原に来たい！」というご希望になりました。

三輪小も天の原小も、私たちは“利用者獲得のため”に SDGs を活用したのではなく、今、夜須高原にできることは何なのかを考え、ESD や SDGs の視点から施設を見つめ直した結果、今までに気づかなかった新たな価値（里地里山の特色）を発見しました。そして、その価値が三輪小や天の原小の先生方にも目にとまり、結果として「夜須高原で新たな活動をしてみよう！」という利用につながったのです。

私たちが新たな施設の価値を生み出したことも、学校（先生）が施設利用の新たな可能性を見出したことも、そして子供たちが従前とは違う施設での体験活動によって新たな学びや気づきができたことも、SDGs が目指す行動変容や社会変革の一歩となります。笹谷氏が述べている「横並びの思考から抜け出す」（横軸）と上述してきた「従前の思考から抜け出す」（縦軸）によって、私たちはスピード感を持って実践を積み重ねていくことが重要ではないでしょうか。

※19 笹谷秀光「新刊〈SDGs 見るだけノート〉のご紹介」『社会教育』日本青年館（2020）
８月号 p. 50

通信 2020.11.23

13　ジブンゴトとバーチャルウォーター

皆さんは「バーチャルウォーター」という言葉をご存じでしょうか。今号は、SDGs6「安全な水とトイレを世界中に」と SDGs12「つくる責任つかう責任」について触れます。

当施設の教育事業「夜須高原こども芸術まつり」では、シャボン玉石けん株式会社様のご協力で、手洗い用のハンドソープをご提供いただきました。参加ファミリーさんたちの活動の時に使用いたしました。「手洗いの手順」が書かれたチラシも頂戴しましたので、併せて活用しました。（右写真）

同社は、自社製品が原因で長年湿疹に悩んでいた先代社長がその反省から、合成洗剤から人に優しい無添加石けんへの製造に改めたという歴史があります。排水しても、石けんカスは川の魚や微生物の栄養源になり、そのまま水中に残ったとしても 3 時間後にはほぼ分解されるそうです。これは、SDGs3「すべての人に健康と福祉を」、SDGs14「海の豊かさを守ろう」、SDGs15「陸の豊かさも守ろう」にも通じてきます。

【参考】「SDGs」「私たちが伝えたいこと」〔シャボン玉石けん株式会社 HP 2021.1.26 参照〕
https://www.shabon.com/approach/index.html

さて、世界では安全で管理された飲料水にアクセスできない人が約 22 億人いるそうです※後掲 20。また、水道水がそのまま飲める国は、10～15 か国と言われています。本通信第 7 号（pp.11-12）では、我が国は“ほぼ SDGs6 は達成されている”との趣旨で述べましたが、じっくりと考えてみると

実はそうでもなさそうなのです。（ちなみに、SDG6 の達成状況について日本は「課題が残っているが、取組は順調に進んでいる」という評価でした。※後掲 21）

その理由は、我が国の食料輸入に関する奇妙な現実にあります。教育事業「ボランティア応援講座」に参加された福岡教育大学の学生さんたちに、「日本は水が豊かであまり不自由を感じないけど、世界でも有数の水輸入国ですよ！」と投げかけてみたら、大変驚いていました。（本通信第５号 p.9）

皆さんは、その実感がありますか？その答えになるのが「バーチャルウォーター（＝仮想水）」です。

【参考】「virtual water」〔環境省 HP 2021.1.26 参照〕
https://www.env.go.jp/water/virtual_water/

例えば、私たちが普段、美味しく食べている「牛丼１杯」には 1,889 リットルの水が、「ハンバーガー1 個」には 999 リットルが出来上がるまでに使用されている計算になるそうなのです※後掲 22。

牛丼の牛肉は、主にアメリカやオーストラリアから輸入されています。牛を飼育して牛肉になるまでには、大量の水が使われています。パンの原料となる小麦も同様で、その多くが輸入に頼っており、小麦粉になるまでには相当量の水を消費しています。牛丼もハンバーガーも、そのものを見ているだけでは水の大量消費のことなど想像できませんが、つまるところ私たち日本人は外国の水資源にも強く依存した生活をしている現実にあるのです。

海外の水のお陰でお腹が満たされていることを思えば、私たちの食生活は SDGs2「飢餓をゼロに」や SDGs13「気候変動に具体的な対策を」にも深くつながっていることが見えてきます。

また、SDGs12「つくる責任つかう責任」では、食品ロスが課題に挙がっています（SDGs12「ターゲット 12.3」参照※前掲 10 p.14）。日本では、本来食べられるのに捨てられている食品量が年間 612 万トン（農林水産省 H29「食糧需給表」）です。一人当たり、毎日、茶碗一杯分のご飯を捨てている計算になるそうです。（次頁図）

1.食品ロスとは

食品ロスとは
「食品ロス」とは、本来食べられるのに捨てられてしまう食品をいうのん。食べ物を捨てることはもったいないことで、環境にも悪い影響を与えてしまうのん。

日本ではどれくらいの食品ロスが発生しているの？（下図参照）
日本の食品廃棄物等は年間2,550万t
その中で本来食べられるのに捨てられる食品「食品ロス」の量は**年間612万t**になっているのん。（平成29年度推計値）
日本人の1人当たりの食品ロス量は1年で約48kgだのん。
これは日本人1人当たりが毎日お茶碗一杯分のご飯を捨てているのと同じ量になるのん。

食品ロスは大きく分けると下記2つに分けることが出来るのん。
事業活動を伴って発生する食品ロス・・**「事業系食品ロス」**
各家庭から発生する食品ロス・・・・・**「家庭系食品ロス」**

【参考】「食品ロス」〔農林水産省 HP 2021.1.26 参照〕
https://www.maff.go.jp/j/shokusan/recycle/syoku_loss/161227_4.html

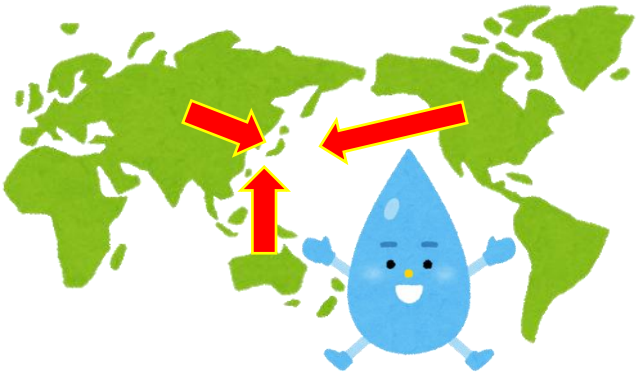
先ほどのバーチャルウォーターも勘案すると、食品廃棄と同時に“大量の水も捨てている”ことになります。

SDGs は“ジブンゴトとしてなかなか意識されにくい”という課題をよく耳にしますが、実は身の回りの生活に深く結び付いているのが SDGs なのです。私たち教育施設は利用者に対し、そうしたことをうまく伝えていく、実感していただくことが重要ではないでしょうか。まさしく、「夜須高原での生活そのものが SDGs である」という視点です。

※20「ユニセフ・世界保健機関 水と衛生に関する共同監査プログラム（JMP）報告書」（2019）

※21「Sustainable Development Report2020」（持続可能な開発報告書）
ベルステルマン財団と持続可能な開発ソリューション・ネットワーク

※22「バーチャルウォーターから分かる水問題とは？」（2020.4.16 配信記事）
〔Website「gooddo 社会課題や SDGs に特化した情報メディア」2021.1.26 参照〕



14　価値の最大化と施設

今号は、渋沢健著『SDGs 投資』（朝日新書）を参考に施設経営を考えます。

本通信第 12 号（p.22）では、SDGs を無視した組織経営という文脈において、そのような組織は「日本の中でも埒外に置かれる」（笹谷氏）という指摘を引用しました。例えば、企業によってはそんな危機感から慌てて SDGs を導入したところもあるかもしれません。しかし、そのような外発的動機づけになってしまうと、SDGs を取り入れるメリットは、「投資先や顧客の獲得・確保のため」という内向きの論理になってしまいます。

そこには、「持続可能な社会づくりのため」という本来の目的や企業の存在意義、社会的責任という視点が消え去ってしまっている状態になります。

渋沢氏は、ノーベル経済学賞受賞者のミルトン・フリードマンの言説（1970 年）「会社の社会貢献は利益の最大化である」を、SDGs が誕生した 21 世紀の文脈から「企業の存在意義とは〈利益の最大化〉ではなく、〈価値の最大化〉である」と読み換えています。そして、「企業が社会に提供する『価値』とは、単に株主の価値だけではなく、経営者、従業員、顧客、取引先、そして社会などの様々なステークホルダー（利害関係者）の価値」であるとしています。※23

先号（p.22）でも紹介しましたが、所長の井上は「SDGs を利用者獲得のツールにしてはならない」と語っています。利用者獲得のための SDGs 推進であるならば、上述した内向き論と同じです。

私たち施設職員は、これまで通り“夜須高原プライド”（本通信第１号 p.2）を胸に、不断の努力を続けていけばよいのではないでしょうか。それが SDGs を意識していなくても、その不断の努力こそが利用者だけでなく施設に関わる全ての方々にとって、SDGs を体現する姿として共感を呼ぶものと信じます。そして、教育施設の「価値の最大化」をも表現するものとなっているはずです。

また、私たちが作成した『夜須高原 ESD・SDGs 学びのガイド』の“あとがき”で再認識した「過去よし」への思いも、価値の最大化そのものと言えます。（本通信第４号 pp.6-7）

※23 渋沢健『SDGs 投資』朝日新書 2020.5 p.29

通信 2020.12.6

15　はじめてのユネスコスクール①　～学びの深化～

今号は、当施設が ESD・SDGs の推進をして以来、初めてユネスコスクール（ESD 推進校）からのご利用（12/4）がありましたので、その報告をします。

大牟田市立天の原小学校の６年生（校外学習）です。同市内の公立全小・中・特別支援学校がユネスコスクールに加盟しているそうです。夜須高原では、森や川の調べ学習をしました。同校は、大牟田市海洋教育推進校です。有明海の近くに立地しており、校区内に川が流れていることから「森・川・海をつなぐ海洋教育」に取組んでいます。

【参考】「特色ある取り組み」〔大牟田市立天の原小学校 HP 2021.1.28 参照〕
http://www.e-net21.city.omuta.fukuoka.jp/amanohara-es/honkounokyouiku.html

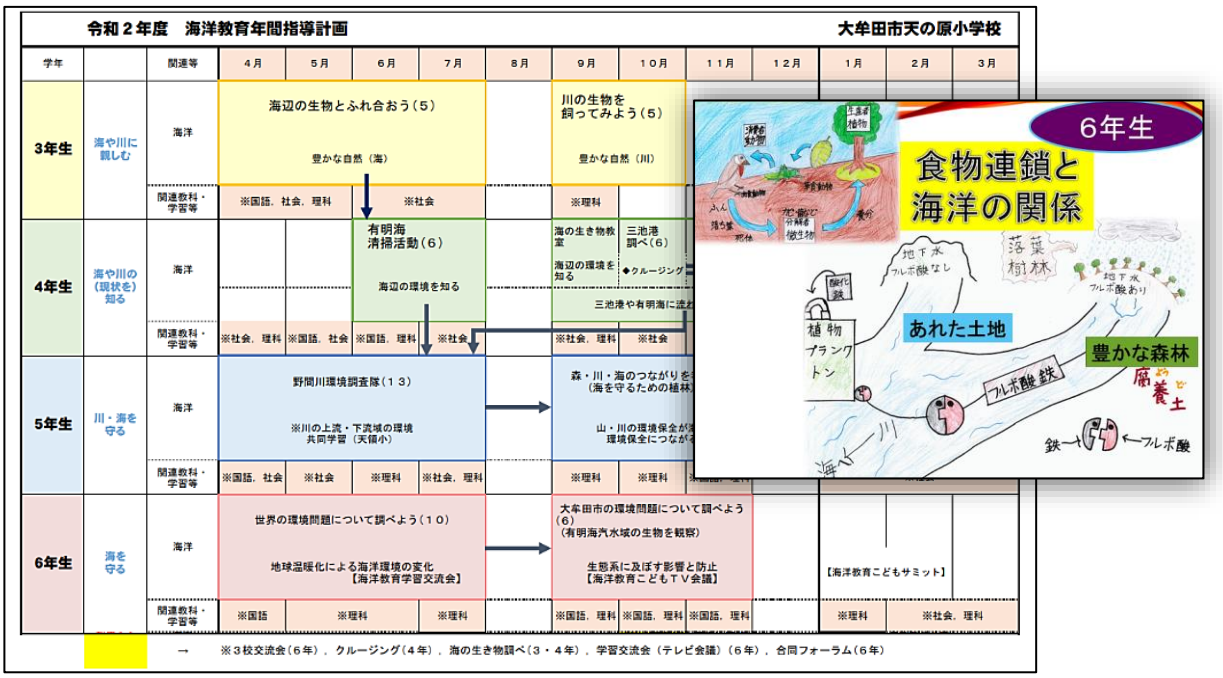
ESD を考える上で、天の原小に学ぶべき点が３つありました（右両図）。ユネスコスクールとしての ESD の学びのエッセンスを垣間見ることができました。

❶ 学校総体での学びの深化
❷ 他者とつながる発想
❸ 伝える活動の連鎖

右図下ように、海そのものだけに視野がとどまらないように指導の工夫がされています。

３年生「海に親しむ」
４年生「海を知る」
５年生「川・海を守る」
６年生「食物連鎖と海洋の関係」

❶「学校総体での学びの深化」は、各学年で海洋教育の体系化がなされており、発達段階に応じた教育計画が綿密に組まれていました。（次頁図）



【出典】左図：天の原小学校「令和２年度海洋教育年間指導計画」〔2021.1.28 参照〕
右図：天の原小学校「森・川・海をつなぐ海洋教育」Powerpoint　〔同上〕
大牟田市 ESD/SDGs 実践アーカイブ http://www.e-net21.city.omuta.fukuoka.jp/omuta-esd/14/14.html

教育活動の中で、６年生は「海・川・森の関係性が知識偏重的になっており、実体験をとおしての理解にまでは結び付いていない…」という課題意識を、先生方はお持ちでした（上右図～天の原小プレゼン資料）。課題解決のための情報収集をネット検索しているうちに、当施設の『ESD・SDGs の学びガイド』がヒットし、施設利用のご相談にまでつながったという次第でした。

担当の先生（以下、先生）からは、「夜須高原が、大牟田市教育委員会ともつながっていることも大きかったです」とも。実は、ESD 推進母体である「大牟田 ESD コンソーシアム」事務局が同市教育委員会内に設置されており、私たち職員が６月に訪問して意見交換をさせていただいていました。

その後、先生が施設に来られ、夜須高原でできる活動内容の確認をされました。対応にあたった（当施設の）樋口次長からの助言も「大変有難かった」とのことでした。次長からは、夜須高原の特色である「里地里山」の自然が、筑後川下流域の住民の暮らしや動植物の多様性に重要な役割を果たしており、海の豊かさにも通じていることが説明されていました。（本通信第 12 号 p.22「夜須高原の里地里山『地域文化』体験を通じた ESD」参照）

先生は、学校に戻って地元の生物・植物生息区域を調べ、森と川との関係性が子供たちにとって身近に感じられるように、事前学習に力を入れられたそうです。そして市の環境保全課にも相談して、「里地里山と川」をテーマに出前授業も実現しました。こうした事前準備や学習をもとに、夜須高原での体験活動となりました。私たち施設からは、居住地との対比から森の豊かさが感じられるように「自然林」「人工林」「竹林」「川の水源」をピックアップし、その場所を歩く「里地里山ウォークラリー」を準備しました。（次頁図）

そして、子供たちがそれぞれの地点で、「見る」「聴く」「触る」「嗅ぐ」活動を取り入れました。これらの活動を終えた子供たちからは、以下のような感想が聞かれました。（下図）

これらを見る限り、今回６年生が学んでいる「食物連鎖と海洋の関係」を紐解く様々なヒントが実体験をとおして見つかったようであり、事前の知識とも結び付いた瞬間であるように感じました。（有明海の干潟の豊かさは、森の植物（栄養素）が大きく関係しています。）

◆ 頭上を見上げると杉の葉が茂っていて、森全体が薄暗い
◇ 森の地面はとても柔らかく、落ち葉が砕けて土の一部になっている
◆ 竹林は手入れがされていないところは荒れている

また、森の「間伐体験」では梢落とし、枝払い、玉切りを体験しました（下写真）。この時も、間伐の役割や素材・燃料としての利活用について職員から話を聞きました。先生から「（夜須職員から）ESD・SDGs を踏まえた指導をいただけることも有難く、私たちが子供たちに（学びとして）求めていることを理解してくださっていることも心強かったです」との感想をいただきました。

私たち施設は、学校（利用団体）にとって期待されているものになり得ているのか常に意識しておくことが重要ですが（訴求力）、ESD・SDGs の推進をとおして、天の原小が求める活動の“受け皿”になれたことは大変光栄でした。

通信 2020.12.12

16　はじめてのユネスコスクール②　～つながりの連続～

前号では、天の原小の特筆すべき特色を３つ紹介し、うち❶を取り上げました。
（❶「学校総体での学びの深化」、❷「他者とつながる発想」、❸「伝える活動の連鎖」）

今号は、❷について報告します。❷「他者とつながる発想」の中でも、同校が取組むESD活動（p.30「海洋教育年間指導計画」参照）において、“夜須高原の里地里山”が見出されたことがまず一番に挙げられます（p.22「夜須高原の里地里山『地域文化』体験を通じたESD」参照）。

大牟田市の小学校（５年生）の多くは、有明海を挟んだ対岸の長崎県にある国立諫早青少年自然の家で毎年、集団宿泊をされていますが、今回はそれとは別に“６年生”が利用されました。つまり、従前の学校・学年行事とは異なる利用目的で夜須高原に来られました。

「海」を学ぶために、一見、対極と思われる「山（森）」に着目し、校区内にある身近な「川」と両者の学習を結び付けました。体験活動においては、“異質な他者”（自分と異なる信念や価値を持つ人）の存在が、時として大きな役割を発揮することもありますが、今回の同校はそれを夜須高原の「職員」に託されていました。（例：下写真）

「里地里山ウォークラリー」（前号P.31）を終えて、子供たちは様々な感想を先生に報告しようとした時、先生はすぐにさえぎって「自分にしないで、施設職員さんに伝えてください…」と、指示されていました。場合によっては、同じ組織内の者が指導（意見）するよりも、外部の人間からの言葉の方が新鮮で心に響きやすいことがあります。そして、多様な考えや多角的な視野に触れる機会にもなります。

この場面では、先生方の願い（思い）がとてもよく理解できましたので、子供たちが森や川で感じたこと、気づいたことを施設職員が聞き役になって、ESD・SDGsを念頭にしながら講評しました。

なお、天の原小の児童さんたちにとっての“他者”の存在は、今回の夜須高原職員に限らず、教育活動の様々な場面でもたくさん見つけることができます。同市内にある海洋教育推進校（みなと小・天領小・駅馬小）とも連携し、お互いによい刺激を受け合いながら地域づくりの提案をされています（下図）。また、大牟田市海洋教育推進校として県外でも広く交流活動をしていますし、SDGsを推進している金沢工業大学からも「SDGs イノベーション教育拠点校」として参加承諾を受けて、SDGs カードゲームの開発等で学生さんたちと交流しています。

このように天の原小は校区を越えて幅広く活動し、様々な方々や機関・団体とつながりながらユネスコスクールとしての実践をされています。そのような小学校がこの度、夜須高原で活動の可能性を見出していただいたことは大変光栄でありました。

つながりの大切さは、SDG.17「パートナーシップで目標を実現しよう」にも込められています。地球的な課題、身近な課題は、個人や団体単独ではとても対処できない現実に人類は直面しており、色々な学びを通じて考え行動し、また様々な人々とつながることによって SDGs 全ての目標達成が期待されています。天の原小が行う ESD には、そうした目的や願いがとてもにじみ出ていました。

【参考】「SDGs の広がり」『大牟田版 SDGs vers2』p.18
〔Website「大牟田市 ESD コンソーシアム」 2021.1.28 参照〕
http://www.e-net21.city.omuta.fukuoka.jp/consortium/images/2021/0121.pdf

通信 2020.12.27

17　はじめてのユネスコスクール③　～“と”の力～

2020 年（令和２年）最後の通信です。引き続き、大牟田市立天の原小学校の活動報告です。今号は「❸伝える活動の連鎖」を取り上げ、本報告を締め括りたいと思います。

前号では、「海と森」「自分と他者」などのように、両者を“つなげる”ことに重点を置いた同校の ESD 活動について紹介しました。渋澤健 氏は前掲書（本通信第 14 号 p.27）で、“つなげる”発想の重要性に触れています。SDGs を念頭に問題や現状を打開する時、二者択一の考え方で進めていくと効率がよいとしつつも、それでは新たなクリエーションは起こらない、と主張しています。

> 「どちらも選ぶ。つまり、一見つながらないものをつなげていく。（中略）
> これからの時代には（“か”＝or ではなく、“と”＝and の力が）最も必要である」。

【出典】渋沢健『SDGs 投資』朝日新書 2020.5 p.70　※補足のため一部修正・加筆

「と」の発想へと導く視点は、同校の活動にも溢れていました（自然林と人工林、土と水、森と川、里地里山と居住地、伐採と保全、等々）。

その様子については、当施設ブログをご覧ください。（右図）

（後日談ですが、「と」の発想について天の原小は「AND 思考」という言葉を用いて、大牟田市の「海洋教育こどもサミット in おおむた」で活動報告をしていました。）

★国立夜須高原青少年自然の家ブログ
「夜須高原のそよ風」　http://yasukougen.blog58.fc2.com/blog-entry-2007.html

これらの体験活動は、同校が活用している SDGs カードゲーム「クロス」でも大変生かされることでしょう（前号 p.33）。クロスは、トレードオフ（“一得一失”の意）の解消について考える教材です。“両得”の力にもなり得る「と」の発想と相まって、クリティカルシンキングが更に深まるものと期待します。

さて、“つなげる”や“伝える”活動は、ESD でも期待されているアクションです。SDGs 達成に必要とされる、行動変容や社会変革へのステップになります。 福岡教育大学の石丸哲史教授は、教育の目的を ESD と絡めながら「知るため」「わかるため」「できるため」「やるため」と、地域 FM 放送で表現されています。（FM KITAQ「森川妙の SDGs ラジオ」※後掲 24）

※24

【参考】FM KITAQ「森川妙の SDGs ラジオ」石丸教授出演回 〔YouTube 動画 2021.1.29 参照〕
https://www.youtube.com/watch?v=cgBZul2NK2g&fbclid=IwAR3skQz_1y8ueNXAHFBJ6GuTy4LCF5HP3i-IBsYw4I_1ejPVMM8Puom_j3Y

「知るため」「わかるため」は従前の教育を踏まえたものであり、「できるため」「やるため」はこれからの時代に求められている教育を、視聴者に分かり易い言葉で説明したものと思われます。この４つの目的を、石丸氏の説明意図とはやや違う教育的観点から借用させていただくと、前２つはまさに夜須高原での“実体験”によるものであり、後２つはその“成果”ということになります。

そして天の原小６年生は、夜須高原での学びをそのままで終わらせず、学校に戻って下級生へ活動報告（伝える活動）をされるそうです。また、来年１月には市内のユネスコスクールが一堂に会する「子どもサミット」でも報告し、更に交流が続くようです。（学校内から学校外へ）

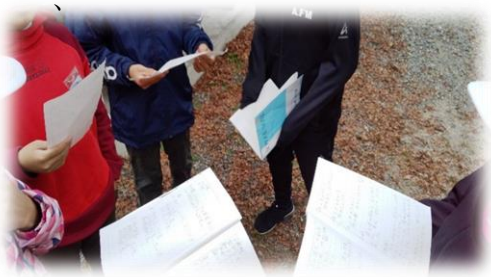
大牟田市教育委員会指導主事 高倉洋美 氏は、次のように報告しています。

> 子供たち一人一人が目指すゴールを自己決定して、自分が取り組む行動を書き込んでいく『未来への SDGs パスポート』が（市内のユネスコスクールで）広がっている。

【出典】『新教育ライブラリ Premier Vol.1 SDGs で変えるこれからの学び』ぎょうせい 2020 p.49

天の原小の児童さんたちがパスポートを持っていれば、その１ページに夜須高原の“検印”を押させていただいた形になります。今後、児童や学級・学年集団、学校総体としての「伝える活動」が共感を呼び、自身や仲間と更なる「行動」へと切り拓かれますことを願っています。

なお、福岡教育大学の石丸氏は上述ラジオ番組において、「クリティカルシンキング（批判的思考）」の姿を、カーリング女子「ロコ・ソラーレ」のかけ声“そだねー”で喩えていました。つまり、“〇〇も考えられるよねー”“〇〇の見方もできるよねー”、というお互いの意見尊重やその積み重ねによる自己省察及び発展的思考です。天の原小の児童さんたちも、夜須高原での“姿”はまさにそれを物語るものでした。（p.33 紹介のブログをご覧ください。“そだねー”の声があちこちの画面から聞こえてくるような気がしませんか？）



通信 2021,1.11

18　ウイズコロナと ESD

新年最初の発信は、新型コロナウイルス（以下、コロナ）との関連を取り上げます。

たくさんの団体や利用者を受け入れる施設としてコロナ感染防止対策は大変重要ですが、今後も有効なワクチンの開発・供給ができるまでこうした状況が続くことを想定した場合、いわゆる“ウイズコロナ”への対応と ESD・SDGs の推進はとても似ているように感じられます。

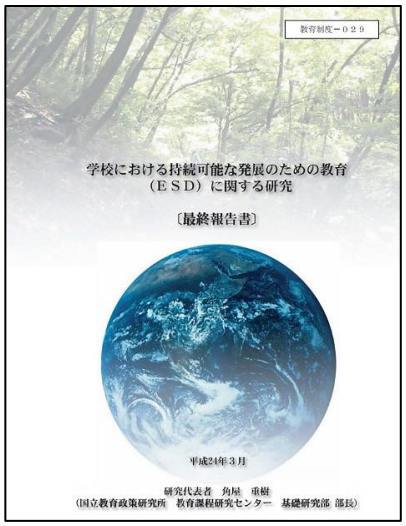
すなわち、生活様式・行動様式を改めなければコロナには打克てないとする注意喚起（前者）と、今の考え方、行動のままでは地球・人類の存続が危機であるとするサステナブルの発信（後者）です。

ESD について、文科省は次のように説明しています。

> 現代社会の課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組む（think globally, act locally）ことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動

【出典】「持続可能な開発のための教育」〔文科省 HP 2021.1.23 参照〕
https://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm

“現代社会の課題”（下線：筆者）をそのまま“コロナ”に当てはめてみると、ESD の学びのプロセスによって獲得された力が、現下のコロナ禍でも十分に生かされるのではないかと思われます。またコロナに関しては、収束（アフターコロナ）までの間、暮らし方に持続可能なスマートさが求められていると思えば､ESD も有効な“ワクチン”に匹敵するような“鍵”になり得るのではないでしょうか。



では、コロナ禍にあって、私たち施設は利用者にどのような ESD が提案できるでしょうか。

国立教育政策研究所の前掲書（本通信第４号 p.7）によると、持続可能な社会づくりの構成概念例を６つ（①多様性、②相互性、③有限性、④公平性、⑤連携性、⑥責任性）挙げています。（P.7 図参照）

【出典】『学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究〔最終報告書〕』（2012）
〔国立教育政策研究所 研究成果アーカイブ　2020.1.29 参照〕
https://nier.repo.nii.ac.jp/index.php?active_action=repository_view_main_item_detail&page_id=13&block_id=21&item_id=459&item_no=1

議論の余地があることは承知の上、これら６つの概念例をウイズコロナとの関係から「持続可能な施設づくり」に置き換えて、以下のように解釈してみたいと思います。

【利用者を取り巻く環境に関する概念】

❶**「多様性」**…様々な団体・人々が、各活動に合った場所や空間で生活している。
❷**「相互性」**…各団体は、それぞれの活動プログラムに沿って、譲り合い行動している。
❸**「有限性」**…施設で対応できることや職員の注意喚起だけでは限界がある。

【利用者の意思や行動に関する概念】

❹**「公平性」**…誰もが、人権や生命の尊重がされて、良好な生活や健康が保証される。
❺**「連携性」**…規則やマナー等、お互いの理解・協力があって、安心・安全に暮らせる。
❻**「責任性」**…一人一人の責任ある行動や自覚によって、施設が成り立つ。

以上のように、感染対策上の生活課題を再整理することによって、利用者には多面的・総合的に取組んでもらえることができるのではないでしょうか。このことについては、強引な引用であるとお叱りをうけるかもしれません。また、上述した❶～❻の補足説明は、そもそも分かり切ったことであるかもしれません。ただ、このように施設利用時における感染対策を ESD の視点から捉え直してみると、コロナ禍であっても実に様々な学びや気づきが見つかる施設であることが分かります。

私たち施設は、コロナ感染予防対策における「利用者受入れガイドライン」を設けていますが、一方的な押し付けになってはいないでしょうか。もちろん、施設として利用者がお互いに安心・安全のため必要最低限のルールづくりは不可欠です。ただ、対策上のお願いや協力の要請が利用者自身（個人）や団体（集団）にとってどのような意味を持つのか、職員がしっかりと理解した上で伝えていくためにも、このような ESD の視点は大変有効であるように感じています。

通信 2021.1.17

19　総体としての SDGs とスマートターゲット

皆さんは「総花的（そうばなてき）」という言葉を聞いたことがありますか？

“関係している人全員にメリットがあるやり方”を意味します。「網羅的」にも似ていますが、やや批判的な意味合いで使われています。

実は、SDGs の 17 目標や 169 ターゲットも「総花的」とよく言われています。一つ一つを個別に見ると、どれもが現代に炙り出された課題を捉えていますので、誰もが納得するかと思いますが、幅広さゆえに向き合い方を一層難しくさせています。だからこそ、本通信第７号（P.11）でも触れたように「モヤモヤ感」を惹起させますし、どこまで“こじつけられるのか？”という疑問や不安を生じさせてしまいます。

これに対し、17 目標に優先順位を付けたり、数点だけに絞り込んだりする「スマートターゲット」の実践も見られます。私たち夜須高原もこれに該当し、『ESD・SDGs 学びのガイド』で提示しています。ちなみに、一つの目標での取組が他の目標にもよい影響を与え、さらに別の目標にも波及していくという好循環が様々なところで報告されています。（『夜須高原 ESD・SDGs 学びのガイド』P.29 「SDGs のつながりについて」をご覧ください。）

慶応義塾大学大学院の蟹江憲史教授は、そもそも論で SDGs をなぜやるのかを、大きく異なる２つの見方で論じています※後掲 25。（右図）

❶ 倫理的に正しいから
❷ 利益になる・得するから

❶は、「SDGs は倫理的に正しいことを並べたものだ、というわけです。『願いのリスト（ウィッシュ・リスト）』を並べることで、賛同者が集まり、それが力になって」いき、人の輪が広まった時に持続可能な社会が実現するという見方です。

❷は、「例えば、無駄な電気を消せば、それだけ電気代が減るし、同時に燃料消費も減る。5 キロ程度の移動であれば、車でなく自転車を使うことで、燃料代がかからず、また燃料を消費しないばかりか、健康にも良い効果が得られる」とし、「同じ論理が SDGs にも適用できます。長期的にみて得をする、あるいは損をしないために SDGs 達成へ向けた行動をとる」という見方です。

❶の「アプローチは、これまでも、エシカル消費や、気候変動対策を行うなかで主張されてきた、いわば伝統的な、環境主義的アプローチと軌を一に」しているものの、「このアプローチでは世の中が大きく『変革』へと舵を切ることはありませんでした」とも述べています。

そして、「SDGs への関心が高揚している本質は、後者（❷）すなわち、行動経済学的説明にあると考えられそう」としつつも、「そう単純ではなさそう」と吐露しています。

その理由ついては、紙幅の関係上、別号で触れたいと思いますが、「大事なのは、SDGs を『総体』として考えることにありそうです。そもそも SDGs が合意された当初から、これは indivisible whole（不可分の全体）して考えるのが大事だということがあらゆる場で強調されてきました。一つ一つ分けて考えることが出来ない、総体として SDGs を見ることの重要性です」と、SDGs への向き合い方を示唆しています。

それでは、「スマートターゲット」を標榜している夜須高原の姿勢は、下線部（筆者）とどうやって整合性を保つことができるのでしょうか。

この点について、蟹江氏は私たちのような施設の特性にも通じる示唆をしています。「もちろん優先課題を設定し、そこから入っていくことは重要です。しかしそれは、『やりやすいところだけやって、それで終わる』ことではない。『やりやすいところから入って、どんどんやる』ことです」。

短い期間に様々な人々が集団生活を送る自然の家で、できることは限られています。そのような特性から、スマートターゲットによって“利用後”の意識面や行動面でも変革の道筋ができるような提案（余韻）が必要ではないでしょうか。つまり、施設として提案できる SDGs は積極的にやって、どうしても抜け落ちてしまう SDGs については施設での経験がその後の日常生活でも生かされるような工夫です。

なお、『夜須高原 ESD・SDGs 学びのガイド』（pp. 21-22）には、施設利用後に期待されている SDGs の学び・つながりを４つ（SDGs1、2、11、17）提示しています（「派生する目標」下図）。そのことも意識しながら、利用団体や利用者への活動支援ができればと思います。

■貫かれる目標
活動や生活全般での集団・グループ・個人として踏まえておくべき行動目標
■活動プログラムの目標
施設にある活動プログラムの特性に応じた活動目標
■派生する目標
上記２つの目標によって将来的につながりが期待できる未来目標

「貫かれる目標」は、施設利用者のあらゆる場面で共有すべき目標になります。前述した『夜須高原 SDGs せいかつ７つのアクションガイド』と併せて、実践して欲しい施設としての願いでもあります。

「活動プログラムの目標」は、施設にある活動プログラムが持ち合わせている特色を踏まえて、想定される目標です。例えば、後述している「夜須高原で体験できる活動プログラム①」は、主にフィールド活動系のプログラムです。同②は野外調理・創作活動系、同③は防災・減災学習系のプログラムです。これら①～③は、活動プログラムの特色を踏まえてグルーピングされており、各々に適当と考えられる SDGs を施設から提案しています。

「派生する目標」は、施設で体験した上記２つの目標を通じて、更に連鎖的・発展的な学びが期待されるであろうと思われる目標です。複雑に絡み合った SDGs に対し、夜須高原での学びが更なる学びを生む好循環が期待されています。前章「4. ESD プログラム化の実際」の「学習指導の留意事項」で説明しました「①教材のつながり」「②人のつながり」「③能力・態度のつながり」とも密接に関係してくる重要な目標になります。

※25 蟹江憲史「我々は、SDGs とどう付き合うべきなのだろうか」
〔Website「2030 SDGs で変える」朝日新聞社（2018. 6. 25 投稿記事） 2021. 1. 16 参照〕

通信 2021.1.21

20　総花的な SDGs と考動

前号では、「総花的（そうばなてき）」という言葉を紹介し、論考しました。これについて、（当施設）所長の井上から以下のような感想をいただきました。

私は、敢えて SDGs を『総花的』として意識しています。SDGs を未来的思考で考えると、敢えて『総花的』と捉えなければならないと思っています。（中略）

『総花的』であるからこそ、一人一人が真剣に考えなければならない。施設でできることは、限られているけど「総花的」として捉えているから『総体』としての SDGs につなぐことができる、と思っています。

夜須高原で学んだ人は、
『この自分の一つの行動が SDGs なんだ』との理解に終わるのではなく、
『この自分の一つの行動が〇〇にもつながる』と、日常との関連付けが何より大切です。

行動を起こすことより大切なことが、「考動」を生み出すことだと考えています。極論ですが、「考動」できる子どもたちを育てていく（目指していく）ことが夜須高原の役目だと感じています。

このことは、井上が「年始挨拶」でも語っていた以下の言葉に通じています。

「今までの施設は、利用者にとって『集団（性）』と『非日常（性）』を体験する場であったが、コロナ禍にあってこれからの施設は『個』と『日常』にもスポットを当てられるものでなくてはならない。」

「考動」と「個」「日常」は、まさに夜須高原の ESD・SDGs が目指そうとしている利用者の“行動”変容の姿や視点ではないでしょうか。また、前号（p.38）で「スマートターゲットによって“利用後”の意識面や行動面でも変革の道筋ができるような提案（余韻）が必要ではないか」と発信しましたが、これについて九州地方 ESD 活動支援センターの職員の方からも感想をいただきました。

「環境省が、現在活用を開始しているナッジ、行動科学の知見を連想しました。同調や、規範に沿う、または損失回避など、受信者がより良い選択を自発的に行うように、そっと後押しするような行動が SDGs にはフィットしそうです。スマートターゲットの設定も一種の後押しであります。強いメッセージだけではなく、寄り添い型のメッセージに、より呼応するという方も多いのではないでしょうか。」

環境省によると、ナッジ（nudge：そっと後押しする）とは、以下のとおりです。

- ● 行動科学の知見（行動インサイト）の活用により、「人々が自分自身にとってより良い選択を自発的に取れるように手助けする政策手法」
- ○ 人々が選択し、意思決定する際の環境をデザインし、それにより行動をもデザインする
- ● 選択の自由を残し、費用対効果の高いことを特徴として、欧米をはじめ世界の200を超える組織が、あらゆる政策領域（SDGs & Beyond）に行動インサイトを活用

【参考】第311回 消費者委員会本会議資料「『ナッジ』とは？」
〔環境省HP「日本版ナッジ・ユニット（BEST）について」 2021.1.23参照〕
http://www.env.go.jp/earth/ondanka/nudge.html

施設からの「寄り添い型メッセージ」によって「考動」を生み出す、というイメージが夜須高原ESD・SDGsにはピッタリではないでしょうか。

最後に、「総花的」に戻りますが、東京大学の工藤尚悟（サステナビリティ学）助教が以下のようなことを述べています。

> SDGsでは17個の目標の下にその達成のための169のターゲットが示されている。これを単純に受け入れると『2030年までにSDGs17目標を達成するために169ターゲットのチェックボックスになるべく多く☑ができるようにみんなで頑張ろう！』という発想になる。私は、これはSDGsの本質をよく理解しないうちに運用したときに起きる典型的な『SDGsの誤用』だと思っている。（中略）
>
> SDGsの17目標は、実は『持続可能な社会』という1つのアイデアを実現するための要素なのである。この要素間のつながりを見るためにシステム思考を用いることがとても重要になる。17目標をそれぞれ分けて個別にチェックリストをつくることは、実はこの目標間に隔たりを生み出してしまうことと同義である。このような縦割り型思考は、世界の持続可能性を脅かすような課題を生み出してきた考え方と言ってもいい。

【出典】工藤尚悟「SDGsブームに感じる違和感：SDGsについて抑えておくべきことリスト」
〔Website of shogo kudo（工藤尚悟の研究ページ） 2021.2.17参照〕 https://www.shogokudo.net/

指摘されている「システム思考」（下線部：筆者）は、「考動」へと大きく道が開かれるきっかけとそうです。※26 参考（システム思考）

※26 「（システム思考は）私たちが近代以降分断し、二項対立図式の捉えてきたさまざまな事象を相互関連する関係性から捉える見方であり、目前にある問題の原因を部分的ではなく、全体的な視野から見ようとする考え方である。」
曽我幸代「持続可能性に求められる思考様式に関する一考察 ： システム思考の視点から」
国立教育政策研究所紀要　第141集　pp.221-230

令和３年（2021 年）３月 22 日　国立夜須高原青少年自然の家　ESD・SDGs プロジェクトチーム

〔代表執筆者：企画指導専門職　上野 修司〕

National Institution For Youth Education
National Yasukogen Youth Outdoor Learning Center
YASUKOGEN
SDGs project

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

「国立夜須高原青少年自然の家」は持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています。

夜須高原
SATOCHI
SATOYAMA